

## 蔵印雑話

### 内村和至

先般、各務支考（一六六五—一七三二）の『和漢百花賦』<sup>かふ</sup>大本一冊（享保一二年成立（一七二七））を手に入れた。支考に興味があつて購入したわけではない。たまたま売りに出ていた本が、私がこしはらく調査を続けている萩原乙彦（一八二六—一八八六）の旧蔵書だったのである（乙彦については本誌第一二二—一六号掲載の拙文を参照されたい）。つまりは、その蔵印（蔵書印）が目当てで買った本である。

題簽の上部が一部剥落しているが（参考図版Ⅰ）、本文には虫喰いも汚れもなく、刷りも悪くはない、なかなか綺麗な本である。もっとも、表紙や紙質から見て、享保の感じはしない。当てずっぽうだが、安永天明（一七七一—一七八九）以降のような気がする。本書は内題が

「新製大和真名／百花賦」で、柱題には「文操別録」とある。「新製大和真名」は支考が創案した和風漢文体のことで、その文体で百花を賦した俳文である。柱題に言う「文操別録」とは、支考編『和漢文操』（享保一二年刊）の別録の謂で、刊語にも「此一冊者為和漢文操之別録、了共先立其集、令板行事者世已知大和詞而早為文場之助与也」とある。刊記を欠く本書が享保一二年成立とされるのも、この刊語に拠るのである。

さて、その蔵印についてだが、本書の扉には七顆が押印されている（参考図版Ⅱ）。印影を上から①から⑦まで番号を付してまとめてみた（参考図版Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）は、縦×横）。なお、印影画像（参考図版Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）は、判読の便宜上、汚れや不鮮明な箇所を除去して加工したも

▽参考図版

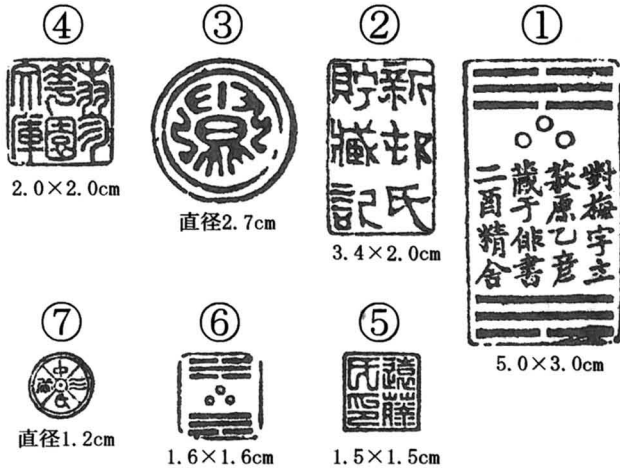
図版Ⅰ 『和漢百華賦』表紙



図版Ⅱ 『和漢百華賦』扉



図版Ⅲ 印影①—⑦



ので、原姿を正確に反映するものではない。あくまでも参考図である。

この七類の中で、萩原乙彦の印は①と⑥の二類である。①は、上部に八卦「坎」の象、その下に丸三点(三つ星)を配し、中央に四行で「対梅宇主／萩原乙彦／蔵于俳諧／二酉精舎」とあって、下部に八卦「巽」の象が配されている。「対梅宇」は乙彦の号で、元来は養父萩原秋巖(一八〇二—一八七七)が居所の号としていたものである。「対梅」は庭に對の梅樹があったことを言うもので、「宇」は「一字の堂」などと建物を数える時の序数詞。つまりは、「二本の梅の木がある屋敷」の意である。秋巖は高名な書家で、その師巻菱湖(一七七七一—一八四三)は市川米庵・貫名海屋とともに「幕末三筆」に数えられた。菱湖は現在でも将棋駒の書体にその名を残している。もっとも菱湖が実際に将棋駒を書いたわけではなく、菱湖の法帖から駒師が集字したものだそうである。当時、秋巖は「菱門四天王」の中で最も勢力を張っていたらしい(他は中沢雪城・大竹蔣塘・生方鼎齋)。「対梅宇」もそれ相応に瀟洒な邸宅だったに違いない。「俳諧二酉精舎」は乙彦の俳書文庫の名で、これを称したのがいつからかはわからない。乙彦が秋巖の養子と

なったのは江戸も瓦解の慶應頃と思われるが、思うさま俳書が買えたのも、秋巖の財力があってのことだったろう。しかし、結局この俳書文庫は、乙彦の没後、売り立てで各所に分散してしまった。「二酉」は、大酉小酉二山の石穴に古書千巻が蔵されていた故事に由来し(『後漢書』「郡国志」)、蔵書の多い喩えである。洒落者の乙彦が通り一遍の名を付けるわけがないから、私はこれは「にわ(二)とり(酉)」の洒落だったろうと思っている。

私の空想はともかく、この印の上下に配された「坎巽」の象は、六四卦の第四八「水風井」に当たる。岩波文庫本『易経』には「井は、邑を改めて井を改めず、喪うなく得るなし、往来井を井とす、汔んど至らんとして、またいまだ井に繻せず。その瓶を羸る。凶なり」とある。私には何のことだかわからない。印の意匠中、丸三点は「星」を意味し、「井」を「星」に置きかえたもの、即ち、「水風星」である。

乙彦は『対梅宇日涉』に「水風星蕉華外史」と号し、また、『月儀要文』附録に「水風星乙彦」を名乗っている。これによって、④の雅印を「水風星」と読むべきは明かである。大した自慢にもならないが、この印を「水風星」と読むべきことを指摘した人はまだいないのでは

ないかと思う。乙彦はこの印を著作の自序にもしばしば用いているから、気に入っていたのだろう。なお、俳人萩原井泉水（一八八四—一九七六）と種田山頭火（一八八二—一九四〇）の俳名も易に由来する。その方面ではわかりきったことなのか、これも指摘している人を見ない気がする。易に因んだ俳名というのは、当時、俳人が好んだ命名法でもあったのだろうか。それはともあれ、乙彦が蔵印と雅印に「水風星」の意を籠めたことは確かだ、それなりの思い入れがあったのことには違いない。

なお、このほかに、乙彦の蔵印としては、「萩原乙彦避險危齋蔵書」「俳書二酉精舎第一主萩原乙彦記」が知られている。機会があれば、これらの印影がある乙彦旧蔵本も手に入れたいものだと思っている。

乙彦旧蔵『和漢百華賦』の印影を得て、私の当初の目的は達せられたのだが、暇に任せて他の印影も調べてみたら、この本の伝来をほぼ知ることができた。以下、その知見をいささか記してみたい。なお、この拙文は論文ではないので、典拠は一々示さなかった。そのほとんどは一般的な辞典やデータベースに依拠したもので、誰でもアクセスできる資料ばかりである。なかでも国文学研

究資料館 (<http://www.nijiac.jp/>) の「蔵書印検索データベース」がなければ、何も調べが付かなかっただろう。些少なりとも印篆の知識が必要とは言え、パソコンのキーを押せばたちどころに判明するわけで、とても便利な世の中になったものである。ただし、私のように、それを使って知ったかぶりをする輩も出てくるのだから、その利便性のよしあしはまた別の話である。

話を本題に戻す。②は「新邨氏貯蔵記」。大和古印風の意匠。これは、新村淳庵の蔵印である（「邨」は「村」と同字）。新村淳庵は明治期の医者で、西洋医学の祖ヒポクラテスを銅版画にして、それに『医聖／必波古拉得斯肖像／附属略伝』（為春堂 明治一三年四月／一八八〇）を付して刊行した人物である（国会図書館デジタルコレクションに全文データがある）。原画はフランスの挿絵画家・銅版画家 J. Massard の作で、それを新村が結城正明（一八四〇—一九〇四）に委嘱して銅版画にしたものという。このあたりの事情は、緒方富雄『日本におけるヒポクラテス賛美』（日本医事新報社 一九七一）に詳しい。緒方富雄（一九〇一—一九八九）は緒方洪庵（一八一〇—一八六三）の曾孫で、杉田玄白『蘭学事始』岩波文庫本の校訂者である。『蘭学事始』は学生

の頃に読んだが、当時は校訂者など気にも留めていなかった。この人は血清学の権威で、医学史や蘭学の著述も多い。出会った本に導かれて本の森をさまよっていると、思わぬところで思わぬ著者に出くわす。この『日本におけるヒポクラテス賛美』は名著である。

緒方によれば、実はこれはヒポクラテスではなくて、聖ヒエロニムスだそうである（参考図版Ⅳ）。この銅版画の肖像はよく知られたもので、私も古書肆の目録や図版で見知っていた。ヒポクラテスが頭の上に光輪を頂いているのはなぜだろうといぶかしく思っていたので、そう言われて納得した。聖ヒエロニムスは、イコノロジ-

図版Ⅳ ヒポクラテス像（緒方の著書より転載）



的には、荒野で野獣に囲まれている構図か、頭蓋骨に手を置いて物思いに耽っている構図が定番らしい。レオナルド・ダ・ヴィンチにも、ライオンの傍らにひざまずく「荒野の聖ヒエロニムス」がある。未完成作ゆえかダ・ビンチのヒエロニムスには髭がないが、通例、ヒエロニムスは禿頭白髯の老人として描かれる。こう言ってはなんだが、見かけ上は、ヒポクラテスもヒエロニムスも大した違いはない。半裸で頭蓋骨に手を置いている禿頭白髯の老人の図を見て、新村がこれをヒポクラテスだと思ったのは無理もない。『医聖／必波古拉得斯肖像／附属略伝』自序によれば、新村は明治初年に東京府病院就学中、お雇い米国人教師からこの肖像画の原画と医書二冊をもたらったという。とすれば、ヒポクラテスとヒエロニムス混同の原因を作ったのは、その米国人教師であって、新村に責任があるわけでもなさそうである。

新村の事跡は、緒方の記すこと以上には知られておらず、その生没年もわからない。『百華賦』を持っていたということ、新村には俳諧趣味でもあったのだろうか。検索で知り得た新村所蔵本に、京都大学附属図書館・谷村文庫所蔵の司馬光『迂書』（文政一二年刊（一八二九））があった。これで何を判断するわけにもいかない

が、ヒボクラテスと各務支考と司馬光とは、何か三題噺のようでもある。

③の印は、蔵印そのものではない。とりあえず『印文学』や『朝陽字鑑精華』などひっくり返してみたが、何と読むのか私には見当がつかなかった。この意匠に似た印は和本にはしばしば見受けられるような気もするが、こういう印を何と呼ぶのかもわからない。手近にあった鄧散木とうさんぼく（一八九八—一九六三）の『篆刻学』（人民美術出版社 一九七九）を見ても、どうもそれらしいものは出てこない。あるいは、書家や篆刻家などには常識なかもしれないと思う。大方の示教を請いたい。

④は「蓼華園文庫」。蓼華りょうか遠藤小五郎の蔵印である。遠藤蓼華は俳書の収集家として知られ、「蓼華園文庫」の多くは、「綿屋文庫」（天理大学図書館）や「雲英文庫」（早稲田大学図書館）などの俳書文庫に伝わっているらしい。⑤の「遠藤氏印」は、名字は同じだが、これが遠藤蓼華の氏名印であるかどうかは確言できない。おそらくそうだろうと思うが、朱泥の色目がやや違うようにも思われ、同時期に押されたものかどうか、やや疑問がないでもない。遠藤蓼華の氏名印は探し出せなかったので、他の表徴を得る機会を待ちたい。

遠藤蓼華については、私にはこれ以上の調べが付かなかったが、その俳書蒐集からしても当時はある程度知られた俳人だったのである。袖すりあうも他生の縁と、この人が校訂した古俳書文庫第一八篇『白扇集・浪化上人発句集』（天青堂 一九二五）を手にしてみた。支考の縁で蕉門の浪化（一六七二—一七〇三）の句集を読むのも縁というものだろう。蓼華の解説を読んでみたところ、諸本の博搜ぶりも堂に入っており、俳人兼研究者とも言うべき人物だったように思われる。また、その謝辞に、俳人角田竹涼から蔵本を借覧した旨が記してあった。竹涼は、「竹冷文庫」角田竹冷（一八五七—一九一九）の間違いかと思つて確認したら、竹冷の子息が竹涼なのだ。これもほとんど世に聞こえなかった俳人のようである。また、辞典類を見たら、「角田」の読みには、本姓・通称・自称が入り乱れ「かくた・つのだ・すみた」の三説があるらしい。竹冷は「つのだ」だとばかり思っていたが、人名は中々にめんどくさいものである。

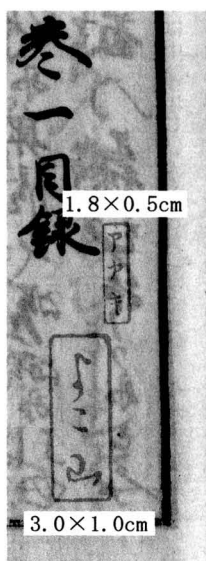
この「蓼華園文庫」に入る前に、この本を所蔵していたのが⑦の蔵印主。この印には時計回りで「中川氏蔵」と記されている。これは中川得楼（一八三三—一九一五）の蔵印である。姓中川、名徳基、字月様。得楼はその

号である。月槎は「げっさ」と読むのであろうか。辞書には「槎」は「筏」の意とある。「月の筏」とはまた風流なアザナと言わねばならない。中川得楼は旧幕時代に御代官所手代を勤めた人物で、極めての愛書家として知られ、自筆の『蔵書目録』一二冊が国会図書館に所蔵されているそうである。幸田露伴の弟で歴史学者の幸田成友（一八七三—一九五四）に「中川德基翁」の一編があり（『番傘・風呂敷・書物』所収 書物展望社 一九三九）、これにはこの印よりも大きい楕円形の「中川氏蔵」の蔵印が紹介されている。幸田によれば、中川は著作をものすでもなく、ひっそりと生涯を閉じたらしい。⑦印の慎ましやかな大きさといい、本のノド下に押された位置といい、その人柄を体しているように思われる。何かなし懐かしい心持ちがする。

以上が扉にある印の概略である。なお、不鮮明なので印影は掲載しなかったが、内題の上部余白に「古之人」という小さな縦長の印がある（二・〇×〇・五釐）。私の検索では該当者を見出し得なかった。印文は荻生徂徠の蔵印「古之人古之人」に倣ったものらしい。あるいは、漢詩文趣味の人だったのかもしれない。この印も奥床し。

この小さな印を見て、稀代の蔵書家だった横山重（一八九六—一九八〇）の「赤木文庫」印を連想した。横山は蔵本に小さい「アカキ」印か「よこ山」印を遠慮がちに用いた。印影は横山本の複製『好色一代男』（日本古典文学会 一九八一）に見ることができ（参考図版Ⅴ）。現在「アカキ」印のある本が市場に出れば、それだけで付加価値が付く。以前、古書肆の目録で「赤木文庫旧蔵」という古書を目撃したことがある。立派な値段だったが、本自体はさほど珍しいものではなかったと記憶する。このように、誰が所蔵していた本かということは、その旧蔵者の声望によって市場価値が変わってくる。骨董品と同じである。それゆえ、蔵印などおいそれと気軽に押せるわけのものではない。もちろん、私は蔵印など持って

図版Ⅴ 横山重・蔵印二種



いないし、作るつもりも押すつもりもない。私が小さな蔵印に心惹かれるのも、その所蔵者の謙退にゆかしさを感ずるからである。

その点からすれば、乙彦の蔵印は大きすぎ、意匠も奇を衒った感じである。印文の「対梅字主」や「俳書二酉精舎」なども夜郎自大のような気がする。無邪気と言えばそうかもしれない。乙彦が生前に被った不評も、そこから辺りに由来すると私は思う。しかし、こういう人物は、実は気が小さく、それゆえにかえって見栄を張りがちなものである。私は挫折続きだった乙彦の人生に気を惹かれるのだが、乙彦の蔵印を眺めていると、「印は人なり」という気がしてくるのである。その意味では、「蓼華園文庫」印は実直ながらやや平凡に見えるし、大和古印風の「新郵氏貯蔵記」は何となく木訥で剛直なもののように思われてくる。そんな空想を掻きたてるのも蔵印の面白さだろう。それで思い出したが、『幸田露伴全集』の第何巻かの口絵に露伴自刻の印があって、その格調高いヘタクソぶりに感動したことがあった。露伴は上手下手など度外視して、刻法に則って謹直に刻したに違いないのである。これに比べると、現代の篆刻作品は作意が勝ちすぎていて、下品な感じがすることが多いようである。

それはともあれ、この『百華賦』の歴代所蔵者を生没と大体の活動時期で区切ってみれば、萩原乙彦↓新村淳庵↓中川得楼↓遠藤蓼華と伝来したとみて間違いないだろう。間に別の人物が入っている可能性はあるが(③印)、まずは由緒正しい本だと言ってよい。それが私如きの手に帰したわけで、なんだか申し訳ないような気もする。しかし、それも一時のこと。私が死ねば、また誰かの手に渡っていくだろう。

私はこのような伝来を持つ本をほとんど持っていないが、名のある文庫から出た本を一冊だけ持っている。と言っても、複製本で和本の原本ではない。資料として買った赤本の複製『さるかに合戦』(稀書複製会 一九二六)がそれで、手元に届いてみたら、川瀬一馬(一九〇六一九九九)の識語と蔵印があったのである。川瀬一馬と言ってもピンと来ない人もいるだろうが、川瀬は日本書誌学の碩学だった。その識語には、「この本藤田秀素の画工名ある桃太郎より少しく後なるべく思はる。版式よりさ思はるゝなり。昭和五十九年甲子正月二日 川瀬一馬識印」とある(参考図版VI)。さすが書誌学の泰斗だけあって、正月早々、赤本の複製本に識語を記したのである。その印は「三柚書屋」と「一馬」である



(参考図版Ⅶ)。庭に数株の柚の木があったので、「三柚書屋」と称したらしい(川瀬一馬『柚の木』中公文庫一九八九)。「対梅宇」と同じ趣向の命名なのもおもしろい。川瀬旧蔵本とは言え、複製本だったからこそ、その文庫からこぼれて、私の手に帰することになったわけで、人の行く末同様、本の行く末もわからないものだと思わされたことであった。

雑話の最後に、先師水野稔(一九一〇—一九九七)の蔵印を紹介しておきたい。先師没して今年で二〇年を閲する。この一月、嬉しいことに先師の『黄表紙・洒落本の世界』(岩波新書 青版九八六)が初版から四〇年を経て再刊された。不肖の弟子ながら感慨ひとしおである。先に挙げた国文学研究資料館「蔵書印検索データベース」には、「水野氏蔵書印」と小型の千社札「下総／水野」の二つが採録されている。しかし、先師の蔵印はもうひとつある。それが「小笹文庫」印である(参考図版Ⅷ)。これはもともと早世された水野家の御次男忠雄氏の印で、それを末弟の先師が引き継いで使っていたものである。原印は、御遺族から委嘱されて、現在私が保管している。一方、「蔵書印検索データベース」に掲載されている

図版Ⅵ 川瀬一馬・識語



図版Ⅶ 川瀬一馬・蔵印二種



図版Ⅷ 水野稔「小笹文庫」印



「水野氏蔵書印」の原印は行方不明になっている。

これらの蔵印が押されている水野稔旧蔵和書は、我が明治大学図書館がそのほとんどを買い上げ、「江戸文藝文庫」の中に「水野本」として収められている。先師旧蔵和書の目録は水野稔遺文集『江戸文芸とともに』（ペリかん社 二〇〇二）に付録しておいたので、その概略はこれを参観されたい。また、収蔵に至る経緯については、拙文「江戸文藝文庫」の創設に寄せて」（明治大学図書館紀要『図書の譜』五 二〇〇一・三）に記しておいた。これを読んだ日本史専攻の平野満先生（一九四六—二〇一四）が、「小笹文庫」印のある本を古書店で買ったよ」と楽しそうに話して下さったことを思い出す。和本以外の先師旧蔵書は古書肆を通じて市場に出て行ったので、平野先生はその中の一冊を買われたのである。あるいは、「小笹文庫」印のある本は、いまでもどこかの古書店でひっそりとその賈を待っているかもしれない。